

# 〈民主〉と〈愛国〉

小熊 英二著

九百六十六頁と大部だが、中身も重量級だ。面白い。正月休みに通読するなら、この一冊である。

『単一民族神話の起源』(『日本人』の境界)と、過ぎた時代の言説を丹念につなぎ合わせて、意想外の図柄を描き出すジグソーパズルのような仕事を手がけた著者が、今回は敗戦から一九七〇年までの戦後の言



(新曜社・六、三〇〇円)

▼おぐま・えいじ 62年東京生まれ、東大大学院博士課程修了。慶応大助教授。『単一民族神話の起源』でサントリー学芸賞。

論を扱う。荒正人、石母田正、清水幾太郎、竹内好、中野重治、南原繁、丸山真男ら懐かしい名前の知識人たちの言説の断片が、万華鏡のように戦後思想の情景を展開させていく。

戦争は、《敗戦後の日本に、……巨大な共同体意識を生みだしていた》。そのうえで著者は、津田左右吉らオールド・リベラリスト、丸山真男ら戦前派、三島由紀夫ら戦中派といった世代の違いによって、微妙な温度差があると指摘する。どの年代でどう戦争を実体験し、どんな傷を受けたかが、各人の言動を規定している。《戦後思想とは、戦争体験の思想化》にはかならないのだ。

つぎに著者は、敗戦直後の混乱期(第一の戦後)と、五五年以降の第二の戦後を区別する。いま戦後として知られているのは、第二の戦後にすぎない。第一の戦後に論じられた

## 公共性の思想を再発見

切実な課題を、当時の文脈のまま掘り起こすと、共産党が愛国を唱え、保守が憲法を擁護するといった「ねじれ」も必然的だったと理解できる。

そして本書の庄巻は、後半。吉本隆明、江藤淳、鶴見俊輔、小田実ら、より若い知識人たちの内実を検証する各章だ。彼らは「戦後知識人」を批判し地歩を築いた。だが、この世代特有の戦争体験に制約されており、批判も半ばは誤解にもとづくという。多数の知識人を共通の土俵に乗せその布置関係を明らかにする著者の方法は、独創的で斬新である。

戦後思想を縦覧した著者は、言論の根底に、言葉にならない心情を発見する。国家が解体した以上は、自己が自己のまま他者と共存する公共性を構想したい。それが「民族」「国民」と呼ばれた。本書は〈民主〉〈愛国〉をキーワードに、戦後の時代が模索した公共性の思想を再発見したのである。

東京工業大学教授

橋爪 大三郎